

03・感度倍増する催淫液に酔いしれながら、欲望全開甘えまくり母乳プレイ

本編トラック02の翌日。

とある年の春。十時ごろ。

場所は、主人公のおじ・おばが住む屋敷の客間。
天気は晴れ。気温は二十度程度。

SE1 外の環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【建物の中から、外の環境音が聞こえる】

【0—10秒ほど流してSE2】

【その後、フェードアウトする】

〈主人公〉

「んう……」

SE2 メルヤが身体を動かす音

【最初から最後まで流す】

主人公とメルヤ、ベッドの中で、裸で横たわっている。

主人公はこの数時間ほど眠り続けていた。

だが、ふとすぐそばで鳴る物音に気付いて、身じろぎをする。

すると、そのままメルヤが近づいてきて……。

主人公の唇にキスをした。

●正面 0センチ

「※4回※ キスする。

唇に軽く触れるだけのキス。

恋人にする、とても甘々なキス」

ちゅっ。ちゅ。

ちゅっ……ちゅっ♡」

メルヤ、流れるように、今度は左耳にキスをする。
声の方向が『正面』から『左』になる。

● 左 0センチ

「※3回※ キスする。

耳の入り口に軽く触れるだけのキス。

恋人にする、とても甘々なキス」

ちゅ。

ちゅ……ちゅっ ♡

「※しばらく※ 耳の穴を舐める。

だんだん奥まで入って行く、しつかりとした耳舐め。

トラツク02までより明らかに慣れている、丁寧な耳舐め」

ちゅっ……んっく……ちゅるっ ♡

ちゅば、ちゅば。くぽっ…… ♡

くちゅ……くちゅっ……ちゅばっ ♡

「※3往復分くらい※ 耳の穴を舐める。

耳の穴の中に入って、丁寧に、とても優しく舐める」

れろれる……れろれる……れろれるっ……。

【※しばらく※ 耳の穴を舐める。

しっかり耳の奥を攻める、しっかりとした耳舐め。

『主人公が好きな舐め方を把握している』という感じの耳舐め』

んっく……ちゅっ。ちゅるるるっ♡

くぼぼぼっ……♡ れるれる。れるれる。れるれる。

【※1回※ 舐める。

可愛い音を立てる、甘々な耳舐め】

ちゅぱっ♡」

今二人が眠るベッドには、繰り返し交わった後特有の、甘くて、だけど不思議と落ち着くような香りが漂っている。

昨晚を境に、主人公の生きる世界は劇的に変わってしまった。

昨日まで、主人公は己の事を『目立たない』『日陰者』『一生モテないに違いない』と思っていた。

だが、今の主人公には、一晩中抱き合った結果、自分のものではないのに、もはや己のもののように馴染んだ手や、唇や、髪の毛がある。

それらは信じられないほど温かく、柔らかく。そばに感じるだけで、とても幸せな気持ちになる。

それから『彼女』の事を、とてもかわいい、愛おしい、好きだと思う。

だから主人公は、夢見心地でそれらを味わう。

そして、たっぷり吸い込みながら目を覚ますと……すぐに『彼女』の名を呼んだ。

〈主人公〉

「んう………♥

めーちゃん………？」

SE3 メルヤが身体を動かす音2

【最初から最後まで流す】

●左 0センチ

「※1回※ 耳の穴を舐める。

主人公が起きた事に気づいて、一度耳舐めをやめる】

れーろっ………♥

これによって『彼女』、つまりメルヤは、主人公が起きた事に気づいたようだ。
主人公の耳を楽しむのに夢中になっていた彼女は、そこで一度耳から舌を離す。

それからとても幸福そうに、だけどどこか切なげな目で主人公を見つめる。
そして、向き直って微笑むと、主人公に覆いかぶさったまま、朝の挨拶をしてくれた。
その時裸の胸と胸が触れ、主人公はドキドキする。

声の方向が『左』から『正面』になる。

● 正面 15センチ

「【穏やかに嬉しそうに。

本編トラック02よりも、明らかに親密な雰囲気です。

トラック02から03の間、つまり、この一晩でかなり親しくなった事がわかる感じで。

『ああ』は感嘆の『ああ』

ああ……おはようございます……♡

ご主人様。お加減はいかがですか？」

〈主人公〉

「うん……昨日よりも、だいたいいいよ……♡」

そう。

主人公の体調は、昨夜からの治療によって、大きく回復した。

依然として身体はうまく動かず、意識はぼんやりしている。

だが、身を焦がすような性衝動はかなり落ち着き、精神的には楽になったのだ。

それはもちろん、メルヤがつきつきりで、その身の全てを使って看病してくれたからだ。メルヤは昨夜、一晩中ひたすらに主人公に尽くし、その欲望を満たし、鎮め。またたふりと満たしては、溢れんばかりの愛情を主人公に注いでくれた。

主人公はそれらを感じ、受け止める度に、ますますメルヤの事を好きになっていった。メルヤの事が好きだ。

自分にはこの人しかない。

そう思いながら、時間の感覚がなくなるほど、お互いの身体の境がわからなくなるほど熱心に絡み合って。

何度も何度も、メルヤの名前を呼んで、好きだと思い、好きだと言った。

そうしながら『メルヤもまた、自分と同じ気持ちでいてくれたら』『こんな始まりにはなってしまったけれど、今回の件を機に、少しずつでも本当に自分の事を好きになってくれたら』と、何度も願い、夢中になって想いを伝え続けた。

そうしているうちに夜が更け、朝になり。疲れてとうとう眠ってしまったのだった。

このようにして伝えた主人公の気持ち、メルヤに正しく届いたかどうかはわからない。

だが、少なくとも、昨日までよりは随分親しくなれている気がする。

すぐに思うようにはいかなかったても、これから真摯に伝え続けていけば、自分達の関係は、もつと良くなるはずだ。

そう思っている。

つまり主人公は、メルヤのお陰で正気を取り戻し始め、前向きに今度の事を考えられるようになってきていた。

課題は山のようにある。それでも、メルヤを想えば、頑張れるような気がしてきているのだ。

● 正面 15センチ

「感情は抑えつつ、とても嬉しそうに、とてもホツとした様子で。

主人公が、本人の自己申告だけでなく、顔色や声の張りも、明らかに昨日よりも元気そうなので。

『自分の治療方針は、ひとまず間違っていないなかったようだ』と安堵している」
然様（さよう）でございますか……♥」

そんな主人公の姿を見て、メルヤが感極まって近づく。

それは一見、昨日の彼女と変わらない態度に思える。

しかし、今の主人公にはわかる。
メルヤは今、とても喜んでくれているのだ。

● 正面 0センチ

「【※1回※】キスする。

唇に軽く触れるだけのキス。

恋人にする、とても甘々なキス」

ちゅ。

【感情は抑えつつ、とても嬉しそうに、とてもホッとした様子で。

改めて主人公を正面から見て、確認しているイメージで」

そうですね。顔色も、昨日よりずっとよくなられて……♡

【少し泣きそうになって。

とても嬉しそうに、とてもホッとした様子で。

このようにメルヤは、できるだけ冷静であろう、『看護師役』でいようと思いつつ、だんだん本音が漏れ始めている。

それは主人公が順調に回復して安心したのもあるし、一晩じゅう繰り返した主人公とのセックスによって、主人公と親密になってきているからでもある。

メルヤは、昨夜よりも明らかに、主人公に心を許し始めている」

本当によかった……♡」

SE 4 主人公とメルヤが抱き合う音

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「全部、全部、めーちゃんのおかげだよ……♡」

主人公、顔にかかるメルヤの髪を優しくよけて撫でながら、いまだ動きづらい身体を、最大限働かせて微笑む。

ちなみに『めーちゃん』というのは、主人公が一晩悩んで考えたメルヤのあだ名だ。

メルヤは昨夜、呼び捨てで構わないと言った。

だが、主人公の性格上……たとえば本人の希望であっても、その呼び方は、どうしても合わないと思ったのだ。

しかし、この呼び方でも、呼ぶのは何だか気恥ずかしい。

『自分のような人間が、メルヤのような素晴らしい女性をこんなにも気安く呼んで。本当に良いのだろうか』と、気後れしてしまうのだ。

●正面 15センチ

「先ほどよりも感情は抑えつつ、少し泣きそうになって。

少し早口になって。

自分でも『まだ完治していないのに、大げさすぎる』と思いつつ、それでもとても嬉しいので」

いいえ。私（わたくし）は当然の事をしただけでございます」

主人公の言葉に、メルヤが少しだけ声を震わせて応える。

その姿には、まだ少し遠慮がある。

主人公にはどうも理解しがたいのだが、メルヤはメルヤで己を低く見積もり『自分のような人間が、主人公と対等であってはならない』と思っているようなのだ。

それでもメルヤは、近づいてそっとキスする。

『治療のためだから』、今の二人はそんな事が簡単にできる。

●正面 0センチ

「※1回※ キスする。

唇に軽く触れるだけのキス。

恋人にする、とても甘々なキス」

ちゅ♡

【少し泣きそうになって。

とても嬉しそうに、とてもホツとした様子で】

ご主人様の元気なお姿を拝見する事が……私（わたくし）の何よりの喜びですもの」

〈主人公〉

「めーちゃん……」

主人公、涙ながらにそう言われて、胸がきゅんとなる。

今二人の心の間にある、垣根のようなもの。

それは、容易に超えられるものではないかもしれない。

主人公とメルヤの関係は、この短時間で少々進みすぎた。

そのせいで違和感が生じるのは自然な事だ。

心の距離は、身体の関係と同じ速度では縮まらないだろう。

それでも二人は、少しずつでも近づこうとしている。

お互いの人柄を信じ、肌を合わせた分だけ勇気を出して。自信がないなりに、もっと深い関係になろうとしている。

〈主人公〉

「……っ♡」

主人公、

——ああ、わたし、めーちゃんの事大好きだ。

この人ともっと、もっと深い関係になって、しっかり繋がりたい……。

と、強くメルヤへの想いを実感しながら、メルヤと見つめ合う。

そのまま二人はお互いに顔を近づけ、そっとキスをする。

その直前、メルヤが泣きそうな顔で目を細めた。

昨夜、何度も何度もそうして、つい数秒前だって唇を重ねたのに。

どこかおっかなびっくり、まるで初めてするかのように、顔を寄せ合って唇に触れてくる。

●正面 0センチ

「【※2回※】キスする。」

わかりやすく音を立てた、嬉しさがにじみ出た、甘々なキス」

ちゅ♡　ちゅっ♡

【※しばらく※　キスする。

遠慮がちなキスから、次第に大胆な、濃厚なキスになっていく。

お互いに夢中になって、舌を絡ませながらキスし続ける、濃厚なデープキス。

とてもラブラブで甘々の、誰が見ても恋人同士のキスでしかないキス」

んんんう……ん♡

ちゅ……ちゅく……ちゅくくくっ……ちゅ♡

ちゅっば、ちゅっば、ちゅっばあ……れるれる、れるれる、れるれる、ちゅるっ♡

【※しばらく※　キスする。

主人公からねっちり攻められる、濃厚なキス。

メルヤは受けに回り、たっぷりとキスされる」

んんんんうっ……♡

んー♡

んー♡

【※1回※　キスする。

軽くイッたような声が出る。

キスが濃厚すぎて、気持ちよすぎて、嬉しすぎたので」

んうう……♡

【※6回※ 呼吸する。

だんだん呼吸が整い、ゆっくりになる。

キスで乱れた呼吸を、ゆっくり整える】

はあ、はあ、はあ。

はあ、はあ、はあ……。

【甘く小さくため息をつく。

とても嬉しそうに、満たされた様子で。

メルヤは今『浮かれすぎてはいけない。主人公は昨夜、自分にすぎるしかなかったからセックスをしただけ。体調が良くなってきた今も、催淫液が心地いいから、それを生み出す自分の事も好ましく感じているだけ』と捉え、己を律しようとしている。

だけでも、主人公への想いが止められそうにない。

ひと時の関係で終わるならなおさら、今沢山触れ合いたくてたまらない。

その位昨夜の行為は、泣きたくなるほど素晴らしく、甘美な経験だったので】

ふう……♡

【困ったように、でも嬉しそうに。

催淫液の事を承知してはいても、嬉しいので。

だが素直に言えず、また『メルヤの事』ではなく『メルヤの身体』という表現をしてし

まう。『主人公が気に入っているのは、自分自身ではなく、自分の身体だけ』と思おうとしているので。

だが、主人公の人柄を考えると、それはあり得ないような気がする。

『主人公はそのような、人をもの扱いする人間ではない』と、メルヤはもうわかってい
るからだ。

また『いくら自虐の側面があるとはいえ、主人公という人間をそのように捉える事は、
とても失礼なのではないか』とも考え始めている。

メルヤの中に、迷いが生じ始めている」

もう、ご主人様ったら……♡

メルヤの身体……そんなにお気に召しましたの……？」

〈主人公〉

「身体だけじゃない♡ 全部しゅき♡ めーちゃんの全部しゅき♡」

主人公、薬と催淫液のせいで回れつが回らないなりに、真剣に思いの丈を伝える。

精神的にはすっきりしても、意識はますますうつとりと、ぼんやりしていくばかりだ。

だが、たとえこのような病状であっても、気持ちは伝えられると信じたかった。

だってこれは、主人公にとって、初めての本気の恋だ。

一度は叶わない、一生好きとは言えないと思っていた相手に。こんな形ではあっても、想いを伝える機会を得られたのだ。

だから今は、それに乗りたい。

たとえ何もかも思い通りにはいかなくて、最後にはすべて泡になって消えてしまうような縁だったとしても。

それならなおさら、今つなげようとしらない理由はない。
そう思ったのだ。

● 正面 0センチ

「『少し泣きそうになりながらも、穏やかに優しく笑う。

必死で己を律している。

昨夜はずっと『主人公に何を言われても真に受けてはいけない。主人公は初めて交わった女性の肉体にのぼせており、また、催淫液に酔わされている。つまりこれは一時の気の迷いなのだ』と思うとしていた。

だが、そうするのはもう限界であり、また、『そう捉えるのは無理がある』と感じ始めているので。

主人公に愛をささやかれる度に胸がきゅんとして、抑えが利かなくなりつつあるので」
ふふ……♡ お上手ですね♡

催淫液を口にしすぎて。少し酔われてしまったのかしら……♡」

〈主人公〉

「本当♡ 本当だよ♡ わたし♡ めーちゃんが大好きだよ……！」

昨日まで、本当はすごくつらかったけど。

めーちゃんが支えてくれたから頑張れたの。

恥ずかしい事もめーちゃんが受け入れてくれたから、すごく安心できたの。
めーちゃんがいるから、わたしはここにいるんだよ」

● 正面 0センチ

「【※息づかい※】だけで表現する。

泣きそうな呼吸。

それでも大きく息を吸って、ひとまず泣くのだけはこらえようとする」

……っ」

主人公の訴えに、メルヤの瞳が揺れる。

困ったように一瞬視線をそらし、それからもう一度こちらを見る。

その目がまた主人公を捉えた時、メルヤはいよいよ泣きそうな顔をしていた。

●正面 0センチ

「少し泣きそうになりながら微笑む。

主人公の今の言葉について、一度は『酔っているからこそその発言だとはわかっている。真に受けてはいけない』と思おうとした。

だが『そう捉えて主人公の話を真面目に聞かない方が、よほど失礼なのではないか』『それに、たとえ主人公の真意がどうであれ、自分はこの言葉がとても嬉しい。その気持ちを、素直に伝えた方がいいのではないか』『自分はいつまで、自分が傷つかない事だけを考えて、逃げ道を残しているのだろうか。限りあるかも知れない主人公との時間を、そのように過ごしていいのだろうか?』と感じ、気持ちが揺れている」

然様（さよう）でございますか？

【※息づかい※ だけで表現する。

鼻をすすって息を吸い、ひとまず泣くのはこらえようとする。

内心、かなりドキドキしている。

『自分が間違っていた。いつまでもこんなうがった見方をしてはいけない』と理解したので。

まずは泣くのをこらえた上で、自分の本心を伝えようと決めたので」
ずずっ。

「少し甘えた、だが真剣な声で。

泣きそうなのは、やや持ち直している。

冗談めかしながらも、本当に主人公に聞きたい事を尋ねる。

メルヤはこんな時も疑問形を用い、主人公の気持ちを確かめてから発言する自分の勇気のなさに、正直嫌気がさしている。

『どうして自分はこんなにも弱く、卑屈な女性なのだろう』と思う。

だがそれでも、こんな自分でも主人公が受け入れてくれたら、自分はもっと勇気を出せるような気がしている。

これによってメルヤは、昨夜からの主従ごっこで、一見主人公を甘えさせているように見せながら、実際はずっと自分が甘えていた事を理解する。

自分から進んで卑しい立場であろうとする事で、本当の気持ちをぶつける事から逃げていた事のだと自覚する。

そんな自分を恥じ、申し訳なく思いながらも、傷つく事を覚悟し、主人公と対等に向き合う決意をする」

メルヤの事。ずっと。ずっと可愛がって下さいますの？
ずっとお側に置いて下さいますの？」

〈主人公〉

「そうだよ♥　ずっと一緒♥　ずっと一緒にいるの♥」

●正面　0センチ

「【※息づかい※　だけで表現する。

泣き出しそうなほど嬉しいので。

だが、大きく息を吸って、ひとまず泣くのはこらえようとする。

『気持ちを表現するのはいいが、今泣くのはおかしいだろう』と思ったので。

『こんな事になって、泣きたいのは主人公のはずだ』と思っているので」

……っ……♥

【少し泣きそうになりながら微笑む。

とても嬉しそうに、主人公の言葉を噛みしめるように話す。

だが、実際はものすごく緊張している。

自分なりに覚悟を決める事にしたので。

それをまだ主人公に伝える事はできない。だが、もう必要以上にへりくだって、主人公

の気持ちを軽く扱うような事はしないと決めたので」

はい……♥

信じます。

ご主人様のお言葉。

信じます……♡

【感激しながら、ドキドキしながら本音を打ち明ける】
大好きです。ご主人様。

【少し泣きそうになりながら。

最大限勇気を出して、己をもの扱いするのをやめる】

本日も、私（わたくし）に。貴方様を愛させて下さいませ……♡」

〈主人公〉

「……うんっ。うんっ……♡」

主人公、メルヤの言葉に喜びがあふれ、たまらなくなつて再び顔を寄せる。
それから、心からの想いを込めてキスをする。

● 正面 0センチ

「【※5回※】 キスする。

主人公からねっちり攻められる、濃厚なキス。

メルヤは受けに回り、めちやくちやにキスされる」

ん♡ っ♡ っ♡ ……♡

ん……んんうっ……♡

【※しばらく※ キスする。

遠慮がちなキスから、次第に大胆な、濃厚なキスになっていく。

お互いに夢中になって、舌を絡ませながらキスし続ける、濃厚なデープキス。とてもラブラブで甘々の、誰が見ても恋人同士のキスでしかないキス】

ちゅっ♡ ちゅっ♡ ちゅ♡

ちゅるっ……ちゅくっ……ちゅぱっ♡

ちゅ♡

ちゅっ♡ ちゅっ♡ ちゅっ♡

ちゅばあっ……♡

れーろ、れーろ、れろっ♡

れろおっ……ちゅるっ♡

【※3回※ キスする。

主人公からねっちり攻められる、濃厚なキス。

メルヤは受けに回り、めちやくちやにキスされる】

んっく。んっく……んっ♡

【※1回※ キスする。

軽くイツたような声が出る。

キスが濃厚すぎて、気持ちよすぎて、嬉しすぎたので」
んんん……っ ♡

【唇を離す。

わかりやすく音を立てて、ちゅぱっと離す】

ちゅぱあっ ♡

【※6回※ 呼吸する。

少し泣きそうな、興奮気味の『荒く、早い』呼吸。

とても幸せそうな、甘い呼吸。

次第にゆっくりになるが、荒いまま】

はあ、はあ、はあ。

はー、はー、はー……っ ♡

〈主人公〉

「めーちゃん好き ♡ 好き ♡ 好きい…… ♡」

たとえどれだけセックスをしていたとしても、好きだと伝えていたとしても。

『捕らえられていた亜人の少女と、それを助けた騎士』

『病に伏せた騎士と、彼女に恩を感じ、尽くす亜人の少女』

二人の関係はまだそこにあり、未来の事など、今はまだ何も見えない。
また、主人公が完治し、元の生活に戻るまでは、己の気持ちを証明する事も出来ないだろう。

それらをすべて理解した上で、主人公はこうする。
メルヤは微笑んで、それに応えてくれる。

● 正面 0センチ

「【少し泣きそうな声で。

くすくすと嬉しそうに、幸せそうに笑う。

しかしだんだんもつと泣きそうになっていく。

とても嬉しくて、幸せで、いよいよ感極まってきたので】

はい♥ 私（わたくし）も大好きです。

ご主人様と沢山、交わりたいです……♥

【甘々に誘う。

多少強引に、セックスをする方向へ持っていく。

これ以上このまま話していると、いよいよ泣き出してしまいそうなので】
ですから、もつと致しましょう。

【※ ※マークまで、舌を出した状態で※ 話す。

泣きそうに、あまあまに誘惑する。

『これ』とは催淫液の事。

舌に乗せた己の唾液、つまり催淫液を見せつけながら話しているイメージで。
少し舌ったらずになってOK」

ご主人様の大好きな、これ……♡ ※

もっともっと、差し上げます……♡

【キスの予備動作。口を開いてキスしようとするイメージ】

んっ……♡

【※しばらく※ キスする。

メルヤから積極的に求める、じゅるじゅる音を立てるデープキス。

また泣きそうなのを誤魔化しながら、夢中でキスをする」

んっ♡ んっ♡ ん……♡

んんう……♡

ちゅるっ。ちゅるるっ。ちゅっ♡

じゅるるる、ちゅばっ♡

ちゅるるるっ……じゅるっ♡

れるれる、れる。れるれる、れる♡

ああんむ……

「ここで唇を離す。

ちゅぱっと、わかりやすく音を立てる」

ちゅぱっ ♡

【※6回※ 呼吸する。

かなり荒く興奮した呼吸。

主人公をうっとり見つめながら、喜びに満たされ、同時に強い性衝動が込み上げてくる。

催淫液ですっかり酔った主人公があまりにも可愛らしく、正直な所『気持ち余すところなく伝えたい。主人公を思いっきり攻めて、犯したくてたまらない』と思い始めているので。

だが、もちろんそんな事はできないので、必死にこらえている」

ふう、ふう、ふうっ。

ふう、ふう。

ふうっ……♡

メルヤ、主人公の左耳に向かって話す。

声の聞こえる方向が『正面』から『左』になる。

● 左 0センチ

「甘く切ない声で。

熱っぽく主人公に己の愛情を伝え、訴えかける」

ご主人様……大好きです。

大好きですっ……♡

【※3回※ キスする。

耳の入り口に触れるだけの軽いキス】

ちゅ♡ ちゅ♡ ちゅ♡

【※3回※ 呼吸する。

少し荒い、うっとりとした呼吸。

主人公を見つめながら、キスの余韻に浸っている】

はぁ、はぁ、はぁ……♡」

主人公、メルヤに熱っぽく、たっぷりと愛情と催淫液を注ぎ込まれて、意識がとろけていく。

そうする事で、またメルヤとの距離が縮まったような気がして嬉しくなる。

だが今の主人公には、まだ気がかりな事があった。

目の前のメルヤの事が大切だ。

だが同時に、自分の回復を待っていてくれるチハ達の事も気がかりだったのだ。だから主人公は、力を振り絞って口を開いた。

〈主人公〉

「あ……あのね……」

聞きたい事が、あるの……」

そんな主人公の言葉に、メルヤが『おや』という顔で目を見開く。
メルヤ、会話をするために、少しだけ離れる。

● 正面 15センチ

「優しく続きを促す。

主人公が、何か言いたい事があるようなので。

内心『何を尋ねられるのだろう』とドキドキしているが、上手く隠す】

うん……？

いかなさいました……？」

〈主人公〉

「みんなは……？」

●正面 15センチ

「穏やかに優しく。」

『ああ、その件か』という感じで。

内心とてもホツとしている。全く問題なく答えられる質問だったので」

ああ………♡」

だが、少なくとも、事態はさほど悪くないようだ。

メルヤは主人公の質問に小さく頷くと、笑顔で答えてくれる。

●正面 15センチ

「【※少し荒い呼吸を残したまま話す※

穏やかに優しく、現在の状況について述べる。

先ほど主人公が眠っている間にメルヤは一度部屋を出て、亜人の少女達の様子を見てきたので。

その時にチハから報告を受け、同時に主人公のおじおばや、チハ達に状況を報告し、今日の動きについても説明を終えているので」

その件でしたら、何も問題ございません。

先ほどご主人様が眠っている間（ま）に一度出て、皆（みな）の様子を見て参りましたの。

ご安心下さい。皆（みな）、元気です。

体調を崩していたダイアナやエイミーも、昨夜おば様の食事を頂き、温かいベッドで休ませて頂けた事で、とても元気になりました」

〈主人公〉

「そっか……。そう……。だったんだ……。

よかった……」

主人公が涙をにじませてホツとした顔を浮かべると、メルヤはとても優しい表情になる。ふふ、と小さく笑って、手の甲を撫でてくれる。

● 正面 15センチ

「【※少し荒い呼吸を残したまま話す※

穏やかに優しく、主人公に体調回復に努めるよう促す】

はい。チハからも『全く心配ない』と報告を受けております。

だからご主人様は安心して、御身（おんみ）の回復に集中なさって下さい。

【穏やかに優しく。

だが、少し心配そうに。

主人公はすでにもうほとんど問題ない位に回復しているが、まだ全快ではないので。解毒剤を飲み、その後しかるべき場所で診察を受けない限りは、油断できないので】
皆（みな）もそれを、望んでおりますから……♡」

SE5 メルヤが主人公の手を握る音

【最初から最後まで流す】

メルヤ、主人公の手や腕を優しくさすりながら、言う。

正面15センチの距離感のまま、ささやく。

★正面 ささやき 15センチ ※マークのセリフまでささやく

「【あまあまに、優しく念を押す。

そうでもしないと主人公は『自分も一度、皆の顔を見に行きたい』などと言って、今すぐ飛び出していきかねないので。

現在の主人公は、本人としては元気なつもりらしい。

だが、その顔はぼーっとしており、言葉もろれつが回らない。

この姿を亜人の少女達に見せたら、かえって心配させてしまいそうなので。

なので『主人公はまだ、亜人の少女達に見せられる姿ではない』と判断し、やんわりとこのまま治療を受けるように促す」

ね？」※

メルヤ、近づいて主人公にキスする。

●正面 0センチ

「【※1回※】キスする。

わかりやすく音を立てた、嬉しさがにじみ出た、甘々なキス」

ちゅ♡

〈主人公〉

「うん……♡ わかった……♡

めーちゃんの治療方針を信じて、お任せするね……♡」

主人公、今すぐチハ達の様子を見に行きたい衝動をこらえ、首肯する。

主人公としては『もう多少動く位問題ない』『姿を見せに行く位平気』だ、と思う。
だが、そう思っている時こそ危ないと、常々ガラテアに言われていた気がする。
だから今は己の体調を主観で判断せず、メルヤにゆだねた方がよいと考えたのだ。

● 正面 15センチ

「優しく微笑んで提案する。

内心かなりホッとしている。

だが、主人公の気持ちを汲んで『夜になっても回復傾向なら、少し位部屋の外へ出てもいいかもしれない』と考え、早速提案する」

はい……♡

ですが、想定よりも早く回復されておられますから。

このまま良い調子が続きましたら、夜、少し顔を出しに行きましかうか」

〈主人公〉

「あ……！ いいね……！ そうしよう！」

メルヤ、小さく頷いて微笑むと、近づいてキスする。

●正面 0センチ

「※1回※ キスする。

唇に軽く触れるだけのキス。

でも、あまあまなキス。

主人公の嬉しそうな顔を見て、
たまらなくなっただので」
ちゅ♡

〈主人公〉

「うん。そうする……！」

ありがとう、心配してくれて」

●正面 0センチ

「穏やかに嬉しそうに。

主人公が嬉しそうなので、メルヤも嬉しい」
ええ……♡

〈主人公〉

「大好きだよ、めーちゃん……♡

わたし、早く身体を治して、みんなのところに行くからね」

●正面 0センチ

「穏やかに微笑む。

素直に喜ぶ主人公が、あまりにも可愛らしいので。

また、回復のために強い意欲を燃やしている主人公を見て『ぜひ応えなくては』と思っている」

ふふ♡

でしたら尚更、治療を頑張らなくてはなりませんね」

SE 6 メルヤが身体を動かす音

「最初から最後まで流す」

メルヤ、少し離れる。

そして主人公の目の前で半身を起こすと、自分の胸を主人公に触らせる。
メルヤ、正面15センチの位置のままささやく。

★正面 ささやく 15センチ ※マークのセリフまでささやく

「優しくそっと、少しセクシーにささやく。

主人公を誘惑し、またセックスに誘導したいので。

これまでは、自分達の関係をあいまいにするためにセックスに誘い、快楽に溺れていた節があった。

だが今は、とても幸せで前向きな気持ちで主人公を誘惑している」
ほら。どうぞ、好きなように……♡

『裸のおっぱい』を少し恥ずかしそうに、でも嬉しそうに。

主人公を誘惑するとはいえ、性的な単語すぎて恥ずかしくなってしまったので」
ご主人様のお好きな……裸のおっぱい、ですよ……♡」※

〈主人公〉

「……………」♡

メルヤ、近づく。

それから、主人公の左耳にささやく。

声の聞こえる方向が『正面』から『左』になる。

★左 ささやく 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「少し荒い息で。

少し恥ずかしそうに。

でも、優しくそっと、少しセクシーにささやく。

恥ずかしいが、それ以上に主人公を喜ばせたいし、今の主人公は、そんな自分の気持ちを理解してくれると思ったので」

※特に聞き手をドキッとさせるイメージでお願いします※
いくら、でも……♡ 揉みしだいて下さいませ……♡」※

〈主人公〉

「……っ♡」

メルヤ、少し離れて元の位置に戻る。

そのまま、自分の胸を主人公に触らせていく。

以降、メルヤ、主人公に胸をたっぷり愛撫されていく。

●正面 15センチ

「小さく、びくつと喘ぐ。

胸に触られ始めたので」

あっ……♡

【小さく息をつく。

快感に耐えてホッとしている。

主人公との関係に対する悲観は和らいだ。

だが『セックスにおいて、自分は主人公を楽しませる側であり、あまり一人で気持ちよくなつてはいけない』という考えは変わっていないので」

……ふう。

【※6回※ 呼吸する。

ゆっくりと、うっとりとした、気持ちよさそうな呼吸。

まだ比較的余裕がある」

はー……♡ はー……♡

はー……♡ はー……♡

はー……♡ はー……♡

はー……♡ はー……♡

【小さく、抑えめに喘ぐ。

胸の、とても気持ちいい所に触れられたので。

まだ比較的余裕がある」

あっ……♡

【※3回※ 呼吸する。

少し荒いが、ゆっくりとした、とても気持ちよさそうな呼吸。

先ほどより少し余裕がなくなっている」

はあっ……。はあっ……。

はあっ……

【※1回※ 呼吸する。

とてもゆっくりと息を吐く。

『なんとか快感に耐えた』という感じの呼吸。

先ほどよりさらに余裕がなくなってきた」

ふううっ……」

〈主人公〉

「……」

あー……。やば……

めーちゃんのおっぱい、本当に気持ちいい……。

主人公、メルヤの裸の胸を下から持ち上げるようにそっと揉みあげ、ふにふにと感触を楽しみながら、どんどんこの行為にのめりこみ、夢中になっていく。

メルヤのそれはあまりにも柔らかく、真っ白で。

きめ細かく、触れると手に吸い付くようで、温かいのだ。

主人公が手のひらで優しく乳房を締め付ける度に、メルヤはびくつと震える。

同時に胸の真ん中で揺れる乳首が、ふるふると小さく震えては硬くなる。

それを見ているとたまらなくなって、主人公は、乳首にしゃぶりつきたくなる衝動をこらえながら、メルヤの胸を、彼女が感じてる様子を堪能する。

●正面 15センチ

「ここから※マークまで、だんだん呼吸が荒くなっていく。
照れ笑いする。

主人公が、メルヤの胸を夢中で触っている事について言及する。

また、これによって、自分がとても感じ始めている事をごまかそうとする」

ふふ……♡

ご主人様ったら……♡

すっかりっ……メルヤのお乳が大好きになってしまわれたのですね……♡※

〈主人公〉

「……えへ……♡ そうだよ……♡

めーちゃんのおっぱい気持ちいいの……♡」

●正面 15センチ

「快感をこらえながら、嬉しそうに微笑む。

また、もっと好きにするように促す。

主人公が素直に認めている様が、とても可愛らしいので
ふふ。

良いですよ……♡

メルヤの全てを……ご主人様に捧げます……♡」

〈主人公〉

「……………♡」

主人公、その言葉に欲望を強く刺激され、下から胸をたっぷり揉みながら、同時に親指で乳首をそっと転がし始める。

●正面 15センチ

「低く、びくっと喘ぐ。

主人公が今の言葉を受けて、親指で乳首を転がし始めたので」

……あ。

【※6回※ 呼吸する。

少し荒く、少し早い、とても気持ちよさそうな呼吸。

余裕がなくなってきた。

胸だけでなく、乳首まで愛撫され始めたので」

はあ、はあ、はあ。

ふう、ふう、ふうっ……。

【※3回※ 呼吸する。

とてもゆっくりした、荒い呼吸。

何とか快感に耐えようとしている。

もうあまり余裕がない」

はー……っ ♡

はー…… ♡

ふうっ…… ♡
」

その時、メルヤが恨めしそうに、快感に涙をにじませた目で主人公を見下ろし、切なげに唇を尖らせる。

それは『もう』『ひどい』と言っているようで、同時に『もっとしてほしい』と言ってい

るようにも見える、あまりにも扇情的な顔だ。

主人公はそれに素直に興奮して、ますますメルヤの胸をいじめ始める。

● 正面 15センチ

「【※5回※】 呼吸する。

早く、荒く、ちよつと泣きそうな呼吸。

あまりに気持ちよく、また、主人公が自分に欲情してくれている事がとても嬉しいので

はあ、はあ。ふうっ………

はあ、はあ。

【小さく、漏れ出るように長く喘ぐ。

呼吸を整えるのに失敗する。

とても気持ちがいいので」

ああ………っ

【低く、小さく、耐えるように喘ぐ。

何とか快感に耐えて持ち直したいので」

っ………

【※12回※】 呼吸する。

早く、荒く、ちよつと泣きそうな呼吸。

あまりに気持ちよく、また、主人公が自分に欲情してくれている事がとても嬉しいので。主人公に跨りながら胸を触られ、涙をにじませて目を閉じて。

そのくせとても気持ちよさそうに胸をいたずらされている様が、主人公にとっても扇情的に映るイメージで」

はあ、はあ、はあ。

はあ、はあ、はあっ……。

ふう、ふー。ふー……。

ふう。ふう。ふう……。

【小さく、びくつと喘ぐ。

とうとう乳首だけを軽くつままれ、それがものすごく気持ちいいので】

あっ………

【※6回※ 呼吸する。

少し早い、とても荒い呼吸。

もうほとんど余裕がない。

その位、乳首への愛撫が気持ちいいので】

はー、はー、はー。

はああ、はああ、はーっ………

【高く、小さく喘ぐ。

くりくりとこねられる動きに翻弄されて喘いでいるイメージ」

あ♥ あ♥ あ♥

【※3回※ 鼻で呼吸する。

早く、荒い呼吸。

ものすごく気持ちよくて、興奮しているので」

ふーっ。ふーっ。ふーっ。

【※1回※ 鼻で呼吸する。

ものすごくゆっくり、荒く呼吸する。

どうにかして持ち直そうとする」

ふー……♥

【甘えた、少し困った声で。

快感をこらえながら、甘々に。

行為にのめり込む主人公について言及して、余裕があるふりをする」

……もう。乳房の先で、遊ぶのが楽しいのですか？」

〈主人公〉

「……うん♥ しゅきい……♥

めーちゃんのおっぱい可愛くて、気持ちいいの♥」

●正面 15センチ

「※はあはあと快感をこらえながら※
嬉しそうに、気持ちよさそうに。

普段の言葉を維持できなくてきて、敬語が崩れてくる」
そう、ですっ。か……♡

【※10回※ 呼吸する。

喘ぎ交じりの少し早い、とても荒い呼吸。
もうほとんど余裕がない。

その位、乳首への愛撫が気持ちいいので」
っあ。

はあ、はあ、はあ。

はあ、はあ。

ああっ……♡

ふう、ふう、ふーっ……♡」

〈主人公〉

「めーちゃん♡ もっとしていい？」

めーちゃんのお乳、もっとなしたい♡」

●正面 15センチ

「【余裕がないなりにくすくす笑って、嬉しそうにとっても気持ちよさそうに。

主人公に欲情されるのが、とても嬉しいので】

ええ……どうぞ存分に……お好きなようにして下さいまし……♡

【※2回※ 呼吸する。

ゆっくりと長い、快感に耐える呼吸】
ふう……ふう。

【呼吸が苦しくて、言葉が途切れる。

余裕があるふりをしたいが、難しくなってくる。

『こねたり』が『こねっ、たり』。

『つまんだり』が『つまん。だり』になる】
どうぞ。

こねっ、たり……♡

つまん。だり……♡

ひっぱっ、たり。して……♡

【苦しそうな呼吸で甘々に。

苦しそうに、何とか言い切るような感じで。

かなり興奮してきている。

自分が気持ちよくなるのは、悪い事だと思っているので。

なので、このような言い方になる。

だが、一方で、悪い事をしている事に興奮している節がある】

硬くなったメルヤの乳首に。お仕置きして下さい……♡」

〈主人公〉

「……………っ♡」

●正面 15センチ

「【小さく、低く喘ぐ。

乳首を軽く、優しく引っ張られたり、くりくりねじられたりして、とても気持ちいいの
で】

……っあ♡

【※6回※ 呼吸する。

早く荒い、興奮した呼吸。

この状況に非常に興奮し、また、乳首への愛撫がとても気持ちいいので」

はあ、はあ、はあ。

はあ、はあ、はあっ……♡」

〈主人公〉

「めーちゃんしゅき♡ しゅき♡

大好きだよ♡ おっぱいされるの気持ちいい？

一杯してあげるからね♡」

● 正面 15センチ

「嬉しそうに。

喘ぎであり、感嘆でもある『ああっ』。

通常通り話そうとして失敗して、喘ぎ声っぱくなる」

ああっ……♡

「嬉しそうに少し早口で。

興奮し、感激している。

『おっぱいされる』は『胸を愛撫される事』という意味。

主人公の言葉を受けて、同じ言い方をしている」

はい♥ 好きです♥

ご主人様におっぱいされるの♥

【こらえるように低く小さく喘ぐ。

なんとか会話を続けたいので】

んっ♥

【※マークまで、少し早口で。

想いを抑えきれない感じで。

感情があふれて、素直な気持ちを言う】

……好きですっ……♥

こうされると、とてもっ。気持ちよくて。

ご主人様ともっと近くなれるような、気がっ♥ します♥

好きです。好きです。好きですご主人様っ♥ ※

【※6回※ 呼吸する。

興奮気味に早く、荒い、とても気持ちよさそうな呼吸】

はあ、はあ、はあ。

はーっ。はーっ。はーっ……♥

【低い声でうっとりと。

ものすごく気持ちいい。

主人公に、気持ちよくなるのを許された気分になって、素直に感じている事を表現できるようにする。

『実際はずっと前から許されていたのに、勝手に己を戒めて、ご主人様の想いを受け止められずにいて、ごめんなさい』『でも、これからは……』と、そんな事を思いながら、快感に没頭していく』

ああ……いい……っ ♡

気持ちいい……っ ♡

【※6回※ 呼吸する。

興奮気味に早く、荒い、とても気持ちよさそうな呼吸】

はあ、はあ、はあ。

はーっ。はーっ。はーっ…… ♡

【低い声でうっとり。

ものすごく気持ちいい】

ああ……ご主人様。

【はあはあとうわごとのように。

少し早口で。だんだんうまく話せなくなっていく。

主人公に、気持ちよくなるのを許された気分になって、素直に感じている事を表現できるようにする。

そしてそれが『気持ちよくてごめんなさい』になる。

感じている事は隠さないし、嬉しいが、申し訳ない気持ちも隠さなくなっているのだから
【気持ちよくて、ごめんなさい……っ ♡

乳首くりくり気持ちよくてっ。

ごめんっ、なさい……っ ♡

【※5回※ 呼吸する。

興奮気味の、とても早く、とても荒い、とても気持ちよさそうな呼吸】

はー。はー。はー。

はーっ。はーっ。

【※濁音喘ぎ※

低い声でうっとりと喘ぐ。

ものすごく気持ちいい】

あ。あ。うあ。

【※6回※ 呼吸する。

興奮気味の、とても早く、とても荒い、とても気持ちよさそうな呼吸】

はー。はー。はー。

はーっ。はーっ。はあっ……っ ♡

【※濁音喘ぎ※

低い声でびくつと喘ぐ。

自分の身体に異変を感じたので」

あっ……!!」

〈主人公〉

「……………」

ここで、メルヤがびくつと大きく震える。

まるで未知の事態に遭遇し、どう対応するか、判断しかねているかのようだ。

●正面 15センチ

「【気持ちよさそうに、でも慌てている様子で。

乳首を刺激されるうちに、これまで感じた事のない甘い刺激が走って、何かが漏れだしそうなので。

不安になり、主人公に『一度愛撫をやめて下さい』と言いたいが、気持ちよくてうまく言えない」

っあ、待っ。

ご主人様。

あの」

だからメルヤは、思わず主人公の肩に手をつき、愛撫をやめさせようとするが、その時にはもう遅かったようだ。

●正面 15センチ

「低い声でびくつと喘ぐ。

今感じている件について、もう手遅れな事を理解する」
あ」

メルヤは低く喘ぐと、観念したように目を閉じる。
それから……。

●正面 15センチ

「高い声で、小さく、びくつと喘ぐ。
乳首イキする。

前触れらしい前触れなく、メルヤとしても自覚が薄いまま、あっさりイってしまふ。
それと共に『ふしやつ♥』と乳首から催淫液が溢れ出す」

あぁっ……♡」

白く可愛らしく、だが、あまりにも大きな存在感で主人公を惑わす乳房から、乳白色の液体を漏らした。

SE7 メルヤの乳首から、催淫液が、ぶしゃつと溢れる音

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「……………！」

それは少量だが、真下にいた主人公の顔に届き、主人公の頬に、ぽたぽたと滴る。想像だにしない光景に主人公は驚くものの、なぜか不思議と、すんなり受け入れる。メルヤの正体が淫魔であると、すでに聞かされていたのがよかったのかもしれない。『人間と身体作りが違うのであれば、きつとこういった事も起こりうるのだろう』と、素直に思えたのだ。

「【申し訳なさそうに驚いて。

喘ぎではなく、気づきの『あっ』

あ………！」

〈主人公〉

「わ………！ す、すごいね………♡」

●正面 15センチ

「【申し訳なさそうに慌てて。

まさかこのような事が起きるとは、露も思っていなかったのだ。

全くそのつもりはなかったとはいえ、主人公の顔に、母乳のようなものをかけてしまった事に変わりはないので」

申し訳、ごいません………っ。

ああ………お顔にかかってしまわれましたね。

すぐ………っ ♡ すぐお拭きします………っ！」

SE8 メルヤが身体を動かす音2

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「……うん。大丈夫。大丈夫だよ。慌てなくていいからね……♡」

だから主人公は、慌てふためくメルヤの腕を優しくさすると、安心させたくて声をかける。

メルヤの乳首から、突然母乳のようなものが出てきた。

それは確かに想定外ではあった。

だが、それは他の部位から分泌される催淫液と同じようにいい匂いがして、とても悪いものには思えない。

だから主人公は、

——むしろ、めーちゃんがこんなにも慌ててるのは、貴重で、可愛い……♡
思うに、これはきつと催淫液の一種なんだろうし。
わたしは何も怖がってないし、嫌じゃないって事を伝えたい……♡

そう思いながら、口に滴ってきた催淫液を舐める。
それから、頬についた分も手の甲で拭って、味わった。

メルヤはそれを、恥ずかしそうに見下ろしている。

●正面 15センチ

「【申し訳なさそうに、恥ずかしそうに、慌てて。

だが、どこか嬉しそうに。

この突然の現象まで、主人公が受け入れてくれている事がとても嬉しいので】
ああ……お舐めになるなんて……」

〈主人公〉

「大丈夫だよ……♡ だって、これもきっと、催淫液なんだよね……?」

●正面 15センチ

「【※マークまで、申し訳なさそうに、とても恥ずかしそうに、もじもじと。

主人公がちっとも驚かず、嫌がらず、この状況を受け入れているので。

そのせいで、かえってメルヤの方が恥ずかしく、もじもじとしてしまうので。
それでもひとまず、この現象について、自分なりの見解を述べる】

……はい。これも、催淫液の一種のようです。

どうやら……ご主人様と結ばれて。

「特に恥ずかしそうに。

でも、嬉しそうに。

『まぐわった』とは『セックスした』という意味なので、言いづらい。

また、母乳のような催淫液が出た事で、妊娠していないのに、主人公に妊娠させられて身体の変化が起きたような気分になり、恥ずかしくも、嬉しい」

つまり……初めて、まぐわった。事で……♡

私（わたくし）の身体も、少々変化しているようなのです……。

そのせいで……その。

乳頭（にゅうとう）、からも、催淫液が出るようになってしまったようで……」

〈主人公〉

「そうだったん……だね……♡」

主人公、メルヤの話を聞きながら、この状況に、だんだんと興奮が高まっていく。

予想通り、悪い事が起きている訳ではなさそうだし……何より、催淫液を直接顔にかけられるのは、少々刺激的過ぎた。

ただでさえぼんやりとした頭が欲望に染まり、もっとメルヤを愛撫して、もっと一緒に気持ちよくなりたい衝動が高まっていく。

●正面 15センチ

「はあはあと興奮しながら。

申し訳なさそうに、とても恥ずかしそうに照れ笑いする。

恥ずかしさをごまかしたいので。

これまで催淫液が出なかった乳頭から、催淫液を出す。この事を『メルヤはおっぱいで、こんなにも感じてしまいました』と言っているようなものだ』と捉えているので」

ふふ……。話には、聞いた事があつたのですが。

お子がいる、訳でもないのに。おかしな光景ですね……。♥

『申し訳ありません。やっぱりすぐにお拭きしますね』と言おうとして途切れる」

申し訳ありません。やっぱりすぐにお拭きし……」

〈主人公〉

「……………」
♥

SE9 主人公が身体を動かす音

【最初から最後まで流す】

主人公、とうとう我慢できなくなって、メルヤの乳房を再び持ち上げる。
恥ずかしそうに弁解をし、だがどこか嬉しそうにしているメルヤを見ていたら『自分が彼女にこんな顔をさせているのだ』という実感が高まり、もっと愛し合いたくなったのだ。
メルヤはそれに驚きつつもまるで抵抗せず、それどころか、どこか期待したようなまなざしを向けている。

●正面 15センチ

「【少し驚いて。だが、とても興奮した様子で。

主人公が優しく、催淫液まみれのメルヤの乳房を持ち上げたので】

あっ……!!」

SE10 主人公がメルヤの乳首を舐めて吸う音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【セリフと重ねて流す】

【▲1 で一度ストップする】

【▲2 で再開する】

【▲3 でフェードアウトする】

主人公、激しく興奮しつつ、それでもそっと優しく、メルヤの乳首を吸い始める。
メルヤはそれを、困惑しながらも、興奮した様子で受け入れている。

● 正面 15センチ

「高い声で、小さく、びくつと喘ぐ。」

主人公が、メルヤの乳首を吸い始めたので」

あっ ♡

「低い声で、びくつと喘ぐ。」

※濁音喘ぎ※ が混じる。

だんだん低くなる」

あ。

あ。あ。

「高い声で、小さく、びくつと喘ぐ。」

乳首を吸われて、ものすごく気持ちいいので」

あっ……♡

「激しく興奮しながら、早口気味に。」

『待って』とは言っているものの、本当はもっとしてほしいので。

また、主人公の行動はとても衝動的に思えるのに、愛撫の仕方はとても優しいので」
待ってっ。待って下さいまし♡

そのような事を、なされたらっ……♡

【※3回※ 呼吸する。

興奮気味の、とても早く、とても荒い、とても気持ちよさそうな呼吸。

主人公の愛撫が気持ちいいので」
はーふう、はーふう、はーふう。

【激しく興奮しながら、早口気味に。

困ったような態度を言っているものの、本当はもっとしてほしいので」
出て……っ。また催淫液が出てっ、しまいますっ……♡

【小さく、びくつと喘ぐ。

乳首イキする。2回目。

またも前触れらしい前触れなく、メルヤとしても自覚が薄いまま、あっさりイってしま
う。

それと共に、また乳首から催淫液が溢れ出すが、今度はそれを主人公にたっぷり飲ま
れる」

ああああっ……♡「

▲ 1 ここでSE10が一度ストップする。

主人公、一度メルヤの乳首から口を離す。

● 正面 15センチ

「※4回※ 鼻で呼吸する。

興奮気味の、とても早く、とても荒い、とても気持ちよさそうな呼吸】
ふーっ。

ふう、ふうっ。ふーっ……♡

「※6回※ 呼吸する。

興奮気味の、とても早く、とても荒い呼吸。
段々整えようと、ゆっくりになっていく」

はーっ。はーっ。はー……♡

はーっ、はーっ、はあぁっ……♡」

〈主人公〉

「……めーちゃん、気持ちいいんだね……♡」

主人公、メルヤが小さく頷くとともに、再びメルヤの乳首を吸い始める。

この催淫液を吸っても、特にメルヤの身体に悪い影響はなさそうだ。むしろ、今までよりもさらに気持ちが悪さそうだ。

そう思ったら、もう止める理由がなくなってしまったのだ。

▲ 2 ここでSE10が再開する。

● 正面 15センチ

「【高い声で、小さく、びくつと喘ぐ。

主人公が、メルヤの乳首を吸い始めたので】

うあ♥

【はあはあと激しく興奮しながら。

早口気味に。

乳首でとても感じている事を認め、それを主人公に知ってほしいので。

また『主人公に申し訳ないと思いますが、とても感じてしまう』『謝りながら、感じまくる』という状況に、ものすごく興奮しているので」

はいっ……♥ その通りでございますっ……♥

メルヤの、おっぱいは。

ご主人様に……触って、頂いて。

お乳を、沢山、吸って頂いてっ♡

喜んで……おります……っ♡

はあ、お許し。下さいませ。

お許し、下さいませっ……♡

【小さく、とても気持ちよさそうに喘ぐ。

だんだん声が高くなる。

乳首を吸われて、とても気持ちがいいので】

あ。あ。あぁっ。

あ。あ。あぁっ♡

【※3回※ 呼吸する。

興奮気味の、とても早く、とても荒い、とても気持ち良さそうな呼吸】

ふーはぁっ、ふーはぁっ。ふーはぁっ……♡

【はあはあと激しく興奮しながら。

とても気持ちよさそうに、何とか伝えようとしている、という感じで】

『主人公に申し訳ないと思いたがらも、とても感じてしまう』『謝りながら、感じまくる』
という状況に、ものすごく興奮しているのだ！

ごめんなさい。ごめんなさいっ♡

また……イきます。

早くてごめんなさい……♡

【※濁音喘ぎ※】する。

低い声で、びくっと喘ぐ。

だんだん低くなる」

あ。あ。あ。

【乳首イキする。3回目。

またも前触れらしい前触れなく、メルヤとしても自覚が薄いまま、あっさりイってしま
う。

それと共に、また乳首から催淫液が溢れ出すが、今度はそれを主人公にたっぷり飲ま
れる」

あああ……♡」

▲3 ここでSE10がフェードアウトする。

こうして、メルヤは主人公の唇で、この短い間に三度も達した。

それは昨夜のメルヤとは大きく違い、恥ずかしそうに、申し訳なさそうにはしつつも、
どこか幸福そうだ。

メルヤは『助けられたもの』『治療を施すもの』という立場上、これまで遠慮し続けていたのだろうが……。

それが、乳首からの催淫液のお陰で崩れつつあると感じ、主人公はとても嬉しくなった。

● 正面 15センチ

「【※6回※】 呼吸する。

興奮気味の、とても早く、とても荒い、とても気持ちよさそうな呼吸】

はあ、はあ、はあ。

はあっ。はあっ。はあっ……。

【謝りながらも、どこか嬉しそうに、興奮して。

メルヤが『謝罪しながらイク』というシチュエーションに興奮する性質である事が垣間見える感じで】

申し訳ございません……っ ♡

何度も、何度も一人で達して、しまっ……っ ♡

〈主人公〉

「……………♡」

主人公『気にしないで』と言うように首を振ると、メルヤが達した時に一気に注ぎ込まれた催淫液を、ごくんと飲み干す。

それはメルヤの情欲を余計に煽ったようだ。

メルヤは本心から謝っているようだが、その中には、明らかに興奮の色が混じっている。

●正面 15センチ

「【真剣に謝りながらも、どこか嬉しそうに、興奮して。

メルヤが『悪い事をして、謝罪しながらセックスをする』というシチュエーションに興奮する性質である事が垣間見える感じで」

ああ……沢山お口に……申し訳ありません……♥」

〈主人公〉

「♥」

SE11 主人公が身体を動かす音2

【最初から最後まで流す】

メルヤ、近づく。

● 正面 0センチ

「※3回※ キスされる。

主人公に一方的に攻められるディープキス。

催淫液をたっぷり口移しされる、えっちすぎるキス。

メルヤにとっては、自分の愛液を飲まされているようなものなので」

ん♥ んんー♥ んんうっ……♥」

〈主人公〉

「ふはあっ……♥

いいの♥ これからめーちゃんも一杯気持ちよくなるの♥

わたしと気持ちいいのして、一緒に一杯気持ちよくなるの♥」

だから主人公は、メルヤを引き寄せ、催淫液まみれの口と舌でキスをしてやる。

それからこうも言って、メルヤがますますその気になるように、こちらから仕向けてやる。

● 正面 15センチ

「泣きそうな声で、でもとても興奮して。

主人公の言葉が、とても嬉しいので。

また、今回の行為で自分の性的欲求が解放され始めてきたので。

一人の女性として、主人公とのセックスを楽しみたいという気持ちが沸き、また、主人公であればそれを許してくれると、安心できたので」

はいっ……♡ 承知、しましたっ……♡

これからは♡ メルヤも沢山気持ちよくなります♡
気持ちいいところ♡ ご主人様に見て頂きますっ♡

【※6回※ 呼吸する。

興奮気味の、とても早く荒い呼吸。

どう考えても、まだまだセックスが続くだろう事を予期させる呼吸】

はあ、はあ、はあ。

はーっ♡ はーっ♡ はーっ……♡」

メルヤ、近づく。

●正面 0センチ

「【※1回※ キスする。

軽く唇が触れるだけの、だがあまあまなキス」

ちゅ♡」

その時、メルヤの瞳が、これまでにない色で輝く。

それは、メルヤの正体は淫魔であり、本来、セックスに貪欲である事を主人公に思い出させる。

主人公はこれまで心のどこかで恐れている事があった。

それは『もしメルヤが己の淫魔らしさをむき出しにした時、自分は怖くなってしまっているのか』という事だった。

たとえば口先では『平気だ』『愛している』と言ったって、主人公は一度もそんなメルヤに遭遇していない。だから断言できず『自分の反応が二人の関係を壊してしまったら、どうしよう』と、ひそかな恐れがあった。

でも今『大丈夫だ』と、はつきり思えた。

メルヤは確かに人間ではなく淫魔で、性への欲求も、主人公よりもずっと強いのかもしれないが……欲求の本質は自分と全く同じである。

そう思えたからだ。

メルヤ、話すために少し離れる。

● 正面 15センチ

「おずおずと、でも興奮した、嬉しそうな様子で。

『これから自分のする提案を、主人公ならきつと受け入れてくれる』と思っているので」

あの……ご主人様……♡

実は……その。催淫液、なのですが……♡」

〈主人公〉

「うん……？ なあに？ めーちゃん……♡」

SE12 メルヤが自分のしっぽをつかんで手前に持ってきて、主人公に見せる音

【最初から最後まで流す】

● 正面 15センチ

「おずおずと、でも興奮した、嬉しそうな様子で。

主人公に対するぎらぎらとした欲望が、少しずつ漏れ出始める」

先ほどから……。乳頭、だけではなく。

こちらっ。からも……。♡

しっぽ、からも、溢れてきているようなのです」

主人公が続きを促すと、メルヤの瞳孔が蛇のように細まる。

これまで貞淑な女性だと思っていたメルヤの本性は、きつととてもいやらしくて強欲なのだろう。

おそらく彼女も今日までそれを知らずに来て、戸惑いながらも今、初めてそれを解放しようとしてくれているのだろう。

● 正面 15センチ

「【おずおずと、でも興奮した、嬉しそうな様子で。

丁寧に、恥ずかしそうに申し出ているように見えて、実際は『早く主人公とセックスしたい』『もっと深く交わりたい』と願う気持ちが漏れ出ている感じで。

だが、誘い方はあまりうまくない。

丁寧な言い方でごまかしているだけで、『主人公もうセックスしたいだろう』『性器にしっぽを挿入するのではなく、入口に塗り付けるだけ』といった、なんだか必死なものになってしまう」

ですから……あの。

ご主人様も……もう、お股が切ないでしょう……？

私の。この、しっぱで。

ご主人様のおまんこに……中に、直接。催淫液を塗りつけて差し上げます」

主人公はそれを、とても嬉しいと思ったし——……。

これがメルヤという女性なのだと、とうとう知った気がした。

メルヤ、近づいて、主人公の左耳にささやく。

これによって声の方向が『正面』から『左』になる。

★左 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「優しくそつと、だが興奮が隠し切れない様子で。

丁寧な言い方でごまかしているだけで、一刻も早く主人公とセックスしたくてたまらないので」

今度は私（わたくし）が……一杯気持ちよくして、差し上げますからね……♡」

ここでフェードアウトして終了。